

報告

コロナ下で高1を迎えた 不登校経験のある生徒達

大橋節子 (環太平洋大学)

伊藤美奈子 (奈良女子大学大学院)

松下幸司 (クラーク記念国際高等学校)

要約

本稿は、1992年開校以来、全日制と同様に週に5日通う全日型通信制高校として全国モデルともなったクラーク記念国際高等学校（以下、クラーク高校）の新1年生に焦点を当て、2020年コロナ禍の中、「学校に行かない」のではなく「学校に行けない」事態に陥った不登校経験のある新高1生の「通学する対面授業」や「通学を必要としないオンライン授業」での意欲や出席率などを調査し、その影響を検証するものである。

キーワード：コロナ禍、不登校経験、全日型通信制高校、新1年生

コロナ禍の全日型通信制 クラーク高校の場合

(1) クラーク高校と不登校

世界的な惨事となったコロナ禍により、経済界の大混乱と同様に、教育界にもさまざまな影響が降りかかっている。2020年2月末に出された一斉休校の発令は、学校教育に大混乱をもたらした。この一斉休校は5月まで続き、その間、学校現場ではさまざまな工夫による新しい教育の形が模索されたが、ほぼ平時と変わらない学習環境を提供したのが、学校法人や株式会社など多様な設置者により開校された全国に235校ある通信制高校である。

本研究で対象とするクラーク高校は、創立当初から子どもたちへの「一対一対応」教育に専念し、一人ひとりの子どもの持つ「大志＝夢」を引き出す教育活動を続けてきた（大橋，2014a）。例えば、1993年より単位化された社会体験学習や、1995年に開講した総合学習の先取り「ゼミ制度」など、子どもの個を重要視した教育を展開している。

また、2005年からは子ども達の学習への取り組み

を心理的に支援するカウンセラーの資格を教員が取得し、今まで経験と勘に委ねられてきた生徒指導も理論的背景をもとにした支援を行っている。

同校には、中学校までに不登校を経験した生徒が70%程度の割合で入学しており、長期間にわたって学校に出席したことがない生徒もいる。そのため同校では入学前には学校に馴染めるような仲間作りや、中学以前の基礎からの学び直しプログラムなどの提供をしている。不登校生徒に対応した進路・キャリア支援プログラムに希望を抱き、高校での再起をかけて入学してくる不登校経験者が多い。結果において、同校の卒業率は約95%に達している。

(2) クラーク高校におけるコロナ対応

2020年4月、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、全国の学校では一斉休校となり、同校においても同様の措置をとることになった。それに伴い、不登校支援のために設定された特徴ある教育活動は、新学期早々すべて停止となり、在宅によるオンライン授業（以下、オンライン）がスタートすることとなった。

最大の課題は、この4月に入学した新高1生への対

Table 1：不登校経験の有無によるタイプ分け

小学時代	不登校	不登校	不登校	不登校	登校	登校	登校	登校
中学1・2年	不登校	不登校	登校	登校	不登校	不登校	登校	登校
中学3年	不登校	登校	不登校	登校	不登校	登校	不登校	登校
	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
人数と%	275(15.4)	46(2.6)	13(0.7)	19(1.1)	658(36.9)	144(8.1)	151(8.5)	477(26.8)

応であった。そこで第一段階として、新高1生の小中学校時代の不登校経験の有無を調査することにより、オンラインでどのような対応をすべきかを確認することとした。

この調査の結果を、8つのタイプに分類したのがTable 1である。この表から、小中学校時代に不登校を経験した新高1生は1,306人(全新生の73.2%)で、そのうち1,097人(不登校経験者の84.0%)が中学3年時に不登校であったことがわかる。つまり、多くの新高1生が、高校進学を機に不登校経験から脱却し、高校生活を充実させたものにしようとしていたにも関わらず、“このコロナ禍により出鼻を挫かれた”かたちになったといえる。

そこで同校では、新高1生の不安を払拭させることを最優先課題として、一斉休校開始と同時にオンラインでの授業やホームルーム等をスタートさせた。同校では、ICT教育の一環として2018年より1人1台のiPadを使った学習を実践していたため、教育活動のオンライン化が導入しやすい環境であったことが幸いしたと考えられる。

Table 2は、休校期間中における同校キャンパスの時間割例(新高1生 2020年5月度金曜日)である。同校の授業は、生徒の理解度に応じた教科別習熟度別授業での指導を行うとともに、大学入試改革でも求められる「思考力・判断力・表現力」「主体性・協同性・多様性」という6つの資質・スキルの育成も視野に、新高1生から進路・キャリア支援プログラムを展開している。

また、表現教育に特化したパフォーマンスコースや、英語教育に特化したインターナショナルコースなど、将来の進路に繋がるコース授業を実施している。今回

の休校期間中も、教科別習熟度別授業やコース授業、他キャンパスとの合同キャリア学習等を実施しオンラインではあるが、生徒が興味を持ち学びを継続できるように個に合わせた様々なタイプの授業を展開している。

全国32キャンパスが行った合同授業では、他府県の生徒と出会う機会が創出され“教育の幅”が広がった。このような事も、オンラインへの積極的な出席に繋がったと考えられる。また、オンラインの活用により生徒との個人面談や保護者との三者面談を行う機会が増え、教員と生徒、保護者との接点を持てたことは不登校を経験した生徒本人や家庭の不安が軽減されたと考えられる。

コロナ禍での新しい授業に関するアンケート調査

2020年5月25日に緊急事態宣言が解除され、地域差はあるものの、全国のキャンパスにおいても分散登校が開始された。しかし、①“3密”を防ぐためにクラス全員が一斉に登校することはできず、②第2波や関係者に罹患者が出た場合には再度休校措置をとらなければならないことから、分散登校開始後においても、対面授業(以下、対面)とオンラインを組み合わせたハイブリッド型授業を展開することになった。

このような取り組みを不登校経験のある新高1生の視点から評価するために、コロナ禍での不登校生徒の授業への出席状況や突然の休校時における気持ちや通学への思いについて、同校においてアンケート調査を実施した。

Table 2：休校期間中の(すべてオンラインで実施)

時限	内容
9:00～9:20	SHR
1 限	国語総合
9:30～10:20	【習熟度別】
2 限	進路
10:30～11:20	キャリア学習
3 限	【他キャンパス合同】
11:30～12:20	キャリア学習
昼休み	【他キャンパス合同】
4 限	コース授業
13:10～14:00	コース授業
5 限	
14:10～15:00	
6 限	
15:10～16:10	

方 法

調査対象者：クラーク高校に2020年度に入学した新高1生1,674人。

調査時期：2020年6月30日～7月6日。

調査方法：Microsoft Formを活用し、オンライン調査を行った。

調査内容：①高校入学までの不登校経験の有無（Table 1 参照）、②休校期間中の様子を問う質問（Table 4 参照。10項目、4件法で実施）、③④4月以降のオンライン（6項目）と対面（9項目）についての経験の有無とその評価（Table 5 に示した各項目に対し、後述する5件法で実施）、④オンライン・対面の出席状況を問う質問（「ほとんど出席」「3分の2くらい出席」「半分くらい出席」「3分の1くらい出席」「ほとんど欠席」の5択）であった。

倫理的配慮：調査協力依頼文に「回答は成績などに影響することは一切ない」「個人情報厳重に保護される」「全て数値分析するため、個人名が出ることはない」「答えたくないものは答えなくてよく、途中で中止することも可である」ことなどを明記し、被験者が回答入力をしたことをもって調査への同意を得たこととみなした。

結果と考察

出席率については、「ほとんど出席」「3分の2くらい出席」を＜休みが少ない＞群、「半分くらい出席」「3分の1くらい出席」「ほとんど欠席」を＜休みがち＞群とし、その高低の組み合わせで4群に分け、その人数と比率を、高校入学前までの不登校経験の有無で比較した（Table 3）。

χ^2 検定の結果、不登校経験の有無で出席状況には差異が見出され（ $\chi^2(3) = 20.1, p < .001$ ）、不登校経験群の生徒は、不登校経験なし群に比して、対面にお

いて休みがちとなるケースが多いことがわかる（「オンラインは休みが少なかったが、対面は休みがち」「オンラインも対面も休みがち」を合わせると16.2%）。特に不登校経験群では、オンラインでは出席できていたにも関わらず、対面では不登校になる生徒が多い（8.6%）。しかし、不登校経験群でも80%を超える生徒が、オンラインも対面も3分の2以上登校できており、この数値は同校の例年と比較しても高い出席率であるといえる。

休校期間中の様子については、Table 4 に示す10項目に対し、「とてもそう思う（4点）」「どちらかというと思う（3点）」「どちらかというと思わない（2点）」「そう思わない（1点）」の4件法で回答を求めた。不登校経験の有無による回答の差に対し t 検定を行った結果、「学校に行かなくていいのでほっとしていた」「通学や身支度をしなくていいので楽だった」で有意差が見られ、不登校経験群の方が得点が高かった。不登校経験群は、コロナ禍による休校期間中に登校できないことを「気楽だし、安心だ」と肯定的にとらえる傾向が強かったといえる。これは、不登校経験があるがゆえに、登校に対する不安は強いが、すべての生徒が登校できない状況下においては、その不安が薄らいだという可能性も考えられる。一時的な不安払拭であれば、対面開始後に不安が呼び戻されて再び不登校になることも考えられるが、休校明けも80%を超える出席率であったこと、さらに2019年度6月の新高1生の出席率が83.6%^{注1)}であり、今年度の出席率もほぼ変わらないことを踏まえると、休校期間をポジティブにとらえ、その後の登校に向けたモチベーションアップに繋げた新高1生が少なくなかったと考えられる。

他方、不登校経験なし群は、不登校経験群より「学校に行きたい」「友だちに会いたい」「家にいるのは苦痛」という気持ちが強いことがわかる。不登校経験のない新高1生にとって「学校に行きたいのに行けない」という状況は、自由を奪われるフラストレーションやストレスの溜まる日々であったと推察される。

また、不登校経験群の方が、課題に対する不満（「課

Table 3：不登校経験の有無によるオンライン・対面授業出席状況（人数と群内%）

	オンラインも対面も休み少ない	オンラインは休みがちだったが、対面は休み少ない	オンラインは休みが少なかったが、対面は休みがち	オンラインも対面も休みがち
不登校経験群	778(80.4)	33(3.4)	83(8.6)	74(7.6)
不登校経験なし群	296(89.7)	12(3.6)	8(2.4)	14(4.2)

題が多くてこなすのが大変だった」は低かった。不登校を経験していた生徒の中には、人との接触は苦手でも、与えられた課題に対して地道にこなす力を持っている者が少なくないとも考えられる。

次に、オンラインでの教育活動6項目と対面での教育活動9項目について、「とても満足(4点)」「まあまあ満足(3点)」「あまり満足でない(2点)」「全く満足でない(1点)」「なかった」の5件法で尋ねた。

Table 4 : 高校入学前の不登校経験の有無による休期間中の様子 (平均値の差のt検定)

	不登校経験群	不登校経験なし群	t 値
早く学校に行きたかった	2.85(.91)	3.07(.87)	3.98***
学校に行かずに好きなことができてよかった	2.93(.83)	2.87(.89)	1.20ns
学校に行かなくていいのでほっとしていた	2.32(.92)	2.10(.89)	3.81***
家の中で過ごすのがしんどかった	1.87(.97)	2.08(1.02)	3.41***
通学や身支度をしなくていいので楽だった	3.06(.93)	2.82(.94)	3.95***
人と会えないので淋しかった	2.40(1.10)	2.71(1.08)	4.44***
オンライン授業の方が気楽に参加できた	2.57(1.00)	2.69(.99)	1.78ns
オンライン授業は目も体も疲れた	2.96(1.04)	2.98(1.01)	.22ns
課題が多くてこなすのが大変だった	2.59(1.00)	2.88(.97)	4.53***
友人と会えないのは淋しかった	2.41(1.14)	2.76(1.12)	4.95***

*** $p < .001$

Table 5 : 高校入学前の不登経験有無による高校教育活動の満足度

	不登校経験群		不登校経験なし群		t 値
	体験者数	平均と SD	体験者数	平均と SD	
＜オンラインでの教育活動＞					
オンライン授業	957	2.96(.70)	320	3.00(.75)	.77ns
オンラインホームルーム	928	3.07(.70)	319	3.12(.76)	1.08ns
オンライン面談	807	3.12(.66)	277	3.18(.74)	1.20ns
オンライン集会	795	2.91(.73)	284	3.07(.80)	2.97**
学校からの動画配信	694	2.90(.70)	261	2.98(.75)	1.61ns
オンラインの行事	529	2.77(.78)	226	2.89(.85)	1.95ns
＜対面での教育活動＞					
学校に登校すること	942	3.16(.73)	322	3.37(.58)	4.48***
対面授業	887	3.32(.65)	314	3.37(.70)	1.18ns
友だちに会えること	849	3.36(.76)	292	3.52(.67)	3.33***
先生に会えること	914	3.36(.66)	320	3.44(.68)	1.91ns
入学式や始業式	522	3.02(.71)	220	3.18(.80)	2.51*
部活動	178	3.05(.84)	129	3.29(.74)	2.56**
先生との個別面談	439	3.17(.66)	190	3.29(.65)	2.21*
学校行事	289	3.11(.75)	159	3.26(.70)	2.04*
制服を着ること	855	3.22(.72)	303	3.38(.67)	3.41***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

「なかった」と回答したものを除いた上で、高校入学前の不登校経験の有無による2群で平均値の差の検定を行ったのがTable 5である。

これによると、新高1生における不登校経験群も不登校経験なし群もオンラインでの教育活動の満足度に大きな差はなく、すべての平均値が中央値(2.5点)を超えていた。有意差が見られたのは「オンライン集会」のみで($t(1077) = 2.97, p < .01$)、不登校経験群の方が満足度は低かった。不登校経験のある生徒にとって、多くの同級生と顔を合わせる集会は、たとえオンラインでも苦手意識があったのかもしれない。

一方、対面での教育活動については、オンラインによる教育活動よりも全般的に評価が高く、とりわけ不登校経験なし群の評価が高かった。しかし、不登校経験群もすべての項目で平均が3点(レンジ14点)を超えていたことから、対面での教育活動に対する満足度は全体的に高いといえる。さらに、両群とも「友だちに会えること」の満足度が最も高く(不登校経験群: 3.36、不登校経験なし群: 3.52)、次いで「先生に会えること」(不登校経験群: 3.36、不登校経験なし群: 3.44)、「対面授業」(不登校経験群: 3.32、不登校経験なし群: 3.37)と続いていた。

同校においては、入学試験実施後、合格者に対し月1～2回のペースで事前登校を実施しており、入学前に友人関係を築くことができる機会が設定されている。また、入学前オリエンテーションでは同じ思いを持った仲間がいることがわかり、さらに先輩から高校生活のアドバイスを受け徐々に不安が解消される。2020年度はコロナ禍により新高1生の事前登校が2月までの短期的な実施となったが、休校期間中にもオンラインによるクラス内レクリエーション等の行事を実施したことが「友だちに会えること」「先生に会えること」の満足度が高い結果になったといえるのではないだろうか。同校が重要視する、教育の質(授業)と友だちや教員との人間関係構築が、短期間やオンラインの形式であってもコロナ禍を乗り越えるカギとなったといえよう。

今後の課題

不登校経験のある生徒たちは、そうでない生徒たちに比べて、人との対面やリアルな世界での接触に対する不安や抵抗感が強い。しかし、休校期間後も8割を超える生徒たちが“学校に行く”というかたちでの高校生活を続けている場がある。70%を超える不登校経験のある新高1生の再出発への決意の後押しができる場がある。

このような予期せぬ緊急事態において人と「繋がる」

ことがいかに重要であるか、今回の調査は不登校生徒にとっての学校の存在意義を考える良い機会となった。学校に行かなくても単位は取れる、卒業もできる。しかしそう遠くない将来、人との繋がりを豊かにできるコミュニケーション力や相手の考えを、対面であれオンラインであれ構築できる「繋がる力」が育成できる教育プログラムの実施が必要とされるといえる。

多様で複雑な背景を持つ不登校児童生徒は、国内で16万人を超えている(文科省, 2018)。わかる授業、できる喜び、分かち合う感動を創出するという学校の原点をコロナ禍の中でも見失わない姿勢が、今後にも必要とされている。それぞれの子ども達において、人生の大きな危機ともいえる不登校体験の過去を活かし、今を懸命に生き、未来を見つけるための学びたい空間の開発が急がれる。

注1) 同校においては、毎年全登校日・全授業における出席率を算出し、その動向を分析することで、不登校予備軍の早期発見及び面談等の対策を実施している。

〈引用・参考文献〉

- 伊藤美奈子(2009). 不登校 その心もようと支援の実践. 金子書房.
- 柿崎明子(2020). 進化する「通信制高校」. 週刊東洋経済 8月29日号. 東洋経済新報社. 50-51.
- 文部科学省(2018). 平成30年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について. <https://www.mext.go.jp/content/1410392.pdf>
- 大橋節子(2014a). 「あきらめない」小さな一歩が未来につながる! 「夢・挑戦・達成」の教育を追い求めて. チャイルドサイエンス, 10, 24-26.
- 大橋節子(2014b). 不登校経験のある高校生のレジリエンスに対するパフォーマンス活動の効果と学校適応への影響 ―クラーク高校パフォーマンスコースの実践から―. 甲南女子大学大学院論集, 12, 17-27.
- 大橋節子・金子恵美子(2015). 不登校経験のある高校生のレジリエンス育成と学校適応の質的研究 ―通信制クラーク高校パフォーマンスコースに焦点づけて―. 環太平洋大学研究紀要, 9, 307-318.
- 大橋節子・金子恵美子(2016). 高校生のパフォーマンス(身体表現)活動による学校適応への影響 ―広域通信制クラーク高校の3年間の質的縦断調査の自己評価に着目して―. チャイルドサイエンス, 12, 44-48.